日本文学全集 49

石原慎太郎

太陽の季節

行為と死 他

河出書房

日本文学全集 49 石原慎太郎

© 1974

責任編集
武者小路実篤　川端康成
石坂洋次郎　山本健吉
瀬沼茂樹

昭和43年8月25日　初版発行
昭和49年5月20日　7版発行

著　　者　石原慎太郎
発行者　中島隆之
印刷者　草刈龍平
装　　幀　原　弘
印　　刷・中央精版印刷株式会社
製　　本・中央精版印刷株式会社

発行所　東京都千代田区神田小川町三の六　株式会社　河出書房新社
電話東京（292）大代表 3711
振替口座　東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします
定価はカバー・帯にあります

目　次

太陽の季節……三
処刑の部屋……四一
ファンキー・ジャンプ……七九
鴨……一一五
死の博物誌……一五七
行為と死……二七三
待伏せ……三六九
年　譜　三八七
文学入門　山崎正和　三九一
作家の横顔　篠田正浩　四〇三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

太陽の季節

龍哉が強く英子に魅かれたのは、彼が拳闘に魅かれる気持と同じようなものがあった。

それには、リングで叩きのめされる瞬間、抵抗される人間だけが感じる、あの一種驚愕の入り混った快感に通じるものが確かにあった。

試合で打ち込まれ、ようやく立ち直ってステップを整える時、あるいは、ラウンドの合間、次のゴングを待ちながら、肩を叩いて注意を与えるセカンドの言葉も忘れて、対角に坐っている手強い相手を喘ぎながら睨めつける時、そのたびに彼はかつて何事にも感じることのなかった、新しいギラギラするような喜びを感じる。

そしてゴングと共に飛び出して行く気負った自分を、軽くジャブを交しながら自制する時、その瞬間だけ、彼は始めて自分を取り戻し得たような満足を覚えた。その所為か各ラウンドの初め、ウィービングしながら相手を窺う龍哉は必ず嬉しそうに笑っていた。人はそれを不敵と見るのだ。

それ故、拳闘に対して彼は何時までも慣れることはなかった。試合における彼の冷静さがあるとしても、それは決して熟練から来るものではなかったのだ。だから龍哉は、少くとも拳闘に関しては恐ろしく熱心な選手であった。

生来スポーツに関しては器用であったが、かつて拳闘のように魅かれたものはない。長身と器用さを見込まれて、バスケットクラブに一年ほど籍を置いたことは有ったが、練習や試合で、龍哉は一度手にしたボールをなかなか他にパスしようとはせず、頑固に一人で持って廻った。そのためにパスワークは乱れ、味方は甚だ迷惑するのだ。

国際試合で、外来のバスケットチームの選手が、大きなボールを片掌で攫み、日本の選手を翻弄し苛立たせるのを観た時、外国選手の何食わずしてその実、たまらなく愉快そうにとぼけた表情に彼は拍手した。龍哉はさっそく工夫してそれを真似たが、そうした個人技はハイスクールの競技においては徒らにチームワークを損うだけで排斥された。

彼が始めて拳闘のグラブを嵌めたのは二年の一学期であった。

ある日、午後からの休講続きに、彼は思い出した麻雀の賭での貸金を、拳闘クラブのマネージャーをしている友人の江田から取り立てがてら、ジムを覗きに行ったの

だ。

練習時間前のジムはがらんとしていた。それでも、大学の選手も入れて五六人の部員が、練習支度や軽いウォームアップをしている。

吊るされたサンドバッグ、パンチングバッグ。壁に掛けられたシュウズにグラブ。あるロッカーに画かれた髑髏と骨のぶっちがいを見て龍哉は思わず笑った。そうした風景は、清潔でしんと沈んで、乾き切ってはいながら何か血腥い屠殺場を想わせる。

リングの蔭を曲ると、午前中の英語をサボった佐原が一人でシャドウボクシングをしている。胸に校色の筋を入れた濃紺のトレーニング姿で、無表情に左右を繰り出しては体を沈める彼の動作は、奇妙に見えるが決して滑稽ではなかった。タイツに引き締められた四肢は、彼以外の何者かに操られでもするように、機敏な動作に思わぬパンチを繰り出している。

小柄な佐原が、意外な力を持つのを龍哉は知っていた。前年の秋、大学の定期戦の後で、所謂街の定期戦に加わるために、球場で一緒になった彼のクラスのグループが街に押し出した時、彼等の他人かまわぬ狼藉を咎めた一人の勤め人に、たまたま運悪く彼が対抗校の先輩と知って、皆が酒興にまかせて絡みだすと、しまいにうるさがったその男が仲間の一人を突き飛ばして逃れようとした。その時佐原が黙って前に立ち塞がり、いきなり左手で相手の鳩尾を突き、あっとかがんだその顔を下から突き上げたのだ。男は足元から飛び跳ねるように後へ引っくり返った。余り簡単に料理された相手に、皆は白けた反面、革めて佐原の拳闘部員の肩書を承認したのだ。

佐原は龍哉を認めると、白い歯を出してにっと笑った。龍哉はふと、春休みのある朝早く、兄に代って犬を散歩させていた時のことを思い出した。未だ朝靄のかかった海岸で、赤い上下のトレーニング姿に、白いタオルを巻いて、走りながら時折シャドウしている男を見たのだ。それはハワイから来日していたある級の世界選手権を持つ選手であった。峠を越した言わば老年選手の彼が、一週間後のタイトルマッチで、上り坂の日本の挑戦者に敗れて王座から消えて行かなくてならぬのは、一般の予想でもほとんど確定していたのだ。人気の無い海岸で龍哉に出会った彼は、南国人らしい褐色の顔に、真白い歯を見せて笑った。龍哉は釣り込まれて笑い返した。海岸の端まで走った彼が引き返し、追い越して行く時、思わず龍哉は、何時か見たアメリカの拳闘映画で、選手同士が仲間の健闘を祈る時したように、両掌を組み合わせて前に振りながら叫んだ。

「ヘイ、グッドラック！」

選手は片手を挙げて答えると過ぎて行った。その姿が

遠く靄の内に吸い込まれて行くのを見守りながら、彼は単純に感動していた。彼は自分の演技にも満足したのだ。

〝あいつは敗けて帰っても、きっと今朝のことを思い出すに違いない〟

その瞬間、今し方まで挑戦者の熱心なファンであった龍哉は一変して完全に彼の側にあった。

華やかなスポーツマンに、あのように寂しいまでも孤り切りの姿のある敵しさを、龍哉は彼なりに感じたのだ。そして、それと同じようなものがこの佐原にもふと感じられる。

控室に行くと、マネージャーの江田が二三人の仲間とポーカーをしている。龍哉を見ると、

「よう、何だい」

「うん暇だから来て見たんだ。それにこの前の賭金の取り立てにもな」

「ちえ、厭な野郎が来やがったな。それよりお前も入らねえか、もっともお前は何でも博奕は強えんだ」

彼は仲間に加わって札をもらった。

かつて龍哉は、たいていの賭事に熱中したが、どれにもたちまち上達してしまうと、もう前のように夢中にはなれなかった。彼は所謂ついている相手にも強かった。上達してしまった賭事で感じるものは、相手が自分よりずっと手強くない限り、退屈も加えて、決りきった手数を費す煩わしさでしかない。手非道く負かされることのない勝負に熱中できるのは、金に飢えた賭博師だけだ。どれだけ勝つかと言う興味は、すでに賭とは言えなかった。

時間が経つにつれやって来る部員の数も殖え、ある者は黙って着替え、ある者は覗き込んで冗談を飛ばしながら立って行く。龍哉は例によって勝ってはいたが、だんだん周囲に気が散り出し、それと共に部員以外の自分がその場で勝ち点を漁っていることに妙な後めたさを感じた。彼はふいに言った。

「俺ならクラスは何級だろう」

「何の？」

「拳闘のさ」

後にいた男が背中を叩いて言った。

「そうだな、練習して痩せてフェザーってとこだな」

「俺も拳闘やって見るかな」

「お前、バスケットじゃねえか」

「うん、でもあれウマくないんだ、性に合わねえや」

やがて皆がカードを放り出して支度し出した時、佐原に用事があって立った江田の後から龍哉は言った。

「おい、俺にちょっと試合やらしてくれねえか」

「冗談じゃない、おケガされたらやり切れねえからな。エロなパンツを穿いたバスケとは違うんだぞ」
「一回戦位なら平気だよ、絶対お前に迷惑は掛けないから」
「どうしたの」佐原が訊ねた。
「こいつがね、スパーリングやらせろってきかないんだ。無茶だよ、練習もせずいきなり。殺されたって知らねえぞ」
「体ならバスケでちったあ出来てるから大丈夫だよ。無理はしないから。やらしてくれたら今の分を入れて貸しの方は御破にしてやらあ」
「良いじゃないか、少しやらしてやれよ。俺が加減して相手してやるよ」
「俺は知らねえよ、今日はいないから良いものの、キャプに見つかって見ろ、うるせえんだぜ」

バンテージを巻いてもらいながら龍哉はにやにや笑った。
「何が嬉しいんだよ、馬鹿野郎奴」
「この繃帯、ちょっとイキだな」
「なあにを勝手なこと言ってやがる。それより余り粋に引っ繰り返るなよ、知らねえぞ。下はこれを穿け」
「トレパンなんか、シケないで短いパンツを貸せよ。あの方がイキじゃねえか」
「又か。試合じゃないんですよ。仕様がねえな。良く体操してくれよ」

嵌められたグラブは意外に大きく感じられる。

練習場に出た龍哉を、繩飛びしていた三津田が見つけると、
「何だおい、津川何するんだ」
「佐原とタイトルマッチ」
思い切りサンドバッグを叩いて見た。それは思ったより固く手ごたえがあった。彼はぞくっと身震いを感じる。

リングの廻りには他の部員が面白半分集まっている。ウィービングする龍哉のフォームは、バスケットのフェイント・トラップのモーションに似ている。
「バスケット、しっかりしろよ」
誰かが言うと皆がどっと笑った。

江田は嫌がる龍哉に無理矢理ヘッドギアを附けさせた。彼には自分だけがギアを附けてリングに登るのが、江田の好意は知りつつも、何か侮辱されたように思われてならない。
二人はグラブを合わした。それでも江田がゴングを鳴

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

らしてくれた。

「無理するなよっ」

龍哉のパンチはダックされるまでもなく、ほとんど空を切った。彼には自分より背の低い佐原がますます小さくなって行くように思われ、しまいには自分の防禦を忘れ振り降すようにして左右を振った。その合い間合い間に佐原の、ジャブとは言え強い左が彼の顎をとらえた。ジャブの一つが鼻先に強く当って思わずそらした顔に、防禦の空いたボデイに佐原はストレートを二つ決めるとさっと飛びすさって彼を待った。そのパンチは良く効いたが龍哉は無理に笑おうとして佐原の眼を見た。がその眼は笑ってはいない。窺うような冷く澄んだ眼差しであった。その瞬間龍哉は、焦りと憤りの混った、あの激しい感情に襲われたのだ。

「どうしたっ」誰かが声をかけた。

両腕を締め直すと彼は体でぶつかるように佐原に向って飛び込み、滅茶滅茶に左右を叩きつけた。相手の何処の部分かは知らぬが彼に手ごたえがあった。縺れるようにして二人が廻り、彼がロープを背にした時、佐原の左が心臓に当った。うっと顔をかがめかかった彼の右の眼の辺りをかなり強く左からのアッパアカットがとらえた。龍哉は一瞬真赤な大きなものが顔中を蔽うように激突したのを感じた。右の眼が翳んでいる。

「ちょっと強かった、ごめん」

龍哉は頭を振りながらもう一度出ようとした。その時ゴングが鳴ったのだ。

「良し、おしまい。大丈夫かおい。最後のが効き過ぎたな。でも始終顎を引いてるとこなんざ良いぞ。なかなかやるよ、なあ佐原」

「ああ、パンチの力はずいぶん有るぜ。フックなんかダックしても結構よろめかされたよ」

「お前、バスケなんか止めて拳闘をやるか。もっともこれでたくさんか、そうだろうな」

龍哉には未だ物を言うことが出来ない。顔から胸、肩が、かっと熱をもって腫れているのがわかる。がようやく彼は言った。

「おもしれえな、拳闘は」

「負け惜しみ言うな、面を見て見ろ、バスケの球位腫れちゃったぞ」

「江田、龍の眼をちょっと冷やしてやってよ」

龍哉はそれ以来、佐原に特別の友情を感じた。

こうして彼は拳闘クラブに入ったのだ。彼の退部届を受け取ったバスケットのマネージャーは、

「困ったなあ、せっかくここまで来たのに止められち

や」

とは言ったが、その後で他の仲間に言ったのである。

「拳闘の方がむいてるさ、あ奴は。第一うちで一番チャージの多いのはあ奴なんだからな」

拳闘を始めて以来、日を重ねるに従って彼はこのスポーツに熱中した。打ち合う時のあの感動に加えて、試合の時に自分が孤り切りであると言うことが彼の気に入ったのだ。

その秋晩く行われた、ハイスクールの全国トーナメントに、比較的選手の少かったフェザー級で、早くも龍哉は選手の一員として出場した。組み合わせの抽籤で、彼は運悪く最初の試合に前年度の優勝者を引き当てた。不運に同情する僚友に彼は笑って言った。

「相手が強けりゃなお良いじゃないか。十中八九はかなわねえ奴でも、万が一二にはチャンスは有るんだからね。見てる方にはつまんなくたって、やる方にとったらこんな面白い試合はないさ、やって見なけりゃわからねえよ、やって見なけりゃ」

〝相手は高校離れしたパンチを持ってるんだから、まともに近づかないで遠くからポイントを稼いで行け。リーチはお前の方が長いんだから〟そう言うコーチの注意が試合で守られたのは一回目だけだった。一回早くも二つのカウンターブロウをくった龍哉は、二回に入るや凄じい勢で飛び込んで行ったのだ。一般に激しい打ち合いの少いハイスクールの試合で、観衆が腰を浮かせ本気になって声援するほど凄じい打ち合いが二回三回と続いた。

「うわっ見ちゃいられねえ、KO食うぞ奴あ」

江田が思わず叫んだ。

が結果は龍哉の判定負けであった。三回終了のゴングが鳴った時、彼は左の眦を切られ相手のグラブには血痕が残った。残忍な観衆は龍哉の傷から流れる血潮に、一層の拍手を送った。この傷によって彼は、少くとも観衆には点を稼いだ訳である。

大会終了の翌日の新聞には、フェザー級の部で、開会初頭、新人津川のファイトが最も印象的と書かれてあった。彼はスタミナとかなりのパンチを持つ新人として認められたのだ。

三年生になっての春、横浜のジムで試合の有った日、控室にいる彼の所へ小使が花束を持って来た。それには唯、『津川さん江、頑張って下さい』とあった。たちまち皆が冷やかして言った。

「ありゃあ、お安くねえな。誰だいこりゃ」

「たのんまっせ」

「それでも試合前に持って来るなんざ気が利いてるよな。彼氏リングでのびちまった後じゃ花どころじゃねえ、お鼻の心配でもしなくちゃならねえからな。龍ちゃんどうかお勝ちになってちょうだいね」

「でも俺にも誰だかわかんねえんだぜ」

「おとぼけな」

「本当さ」

「まあ出て見りゃわかるよ」

一番が来てリングに登った龍哉は、その日割に多かった観客の中から容易に先日知り合ったばかりの三人組を見つけることが出来た。彼女達はリングから三列目に坐っている。揃って派手な着飾りように、観客の中でそのブロックだけが際立って華やかに見える。おまけに英子は着物を着ていた。

「拳闘を観に来るのに着物を着てやがる。花見じゃあるまいし」

龍哉は言った。セカンドの江田が片目をつぶると、

「あれだろ」

審判が選手の名を呼んだ時、三人が揃って又彼の名を呼んだ。今までの試合にこんな経験の無かった龍哉は、予期しないものが自分だけの勝負に割り込んで来たような気がし、不興気に眉を寄せながら、それでも片掌を挙げて答えたのだ。

手易い相手だったので龍哉にとっては詰らぬ試合だった。遠くから放ってくるパンチを避け、潜るように胸元に飛び込みブロウを叩きつけるたび、龍哉にはリング際で甲高く声援する英子の声だけが良く聞こえた。その声に煽られるように、必要以上のファイトを彼はしていた。そんな自分を充分意識しながら彼には何故かそれをセーヴすることが出来ない。ゴングでコーナーに帰った時、彼はトランプの賭で後に立った観客を気にする男のような表情を浮べた。龍哉は始めて試合で観衆を気にしたのだ。

二回目早くもグロッキーとなった相手が、倒れかかって彼に抱きついた時、昨年受けた傷の上を相手の頭が激しくバッチングした。そのまま二人を分けた審判は、彼にTKO勝ちを宣したが、彼は相手を睨みつけながら片掌で傷をおさえた。口を開いた傷から血が眼の中へ流れ込んでいる。

「触るなっ！」

江田が叫んだ。

龍哉は片目をつぶったままロープを潜った。

「津川さん」

英子達が呼んでいる。彼は血で浮いた眼を開いて苦笑いしたのだ。

応急の手当をして着替えると、病院へ廻るために江田に送られて皆より一足先にジムを出た。出口に英子達が待っている。

「お怪我なさったの」

「相手が倒れるはずみにぶつかりやがって、前切ったとこ又切っちゃった」

「大丈夫ですか」

「ええ、でも今日は貴女のお供は出来ませんよ。これからちょっと病院へ行くんです」

すると英子が、

「あら、それでしたら私のお車お使いになって。表に有りますの。病院てどちらかしら」

「そいつあすみません。じゃお願いします。お前一人で行ってくれよ、俺は未だ後のことがあるからな」

江田が彼より先に承諾して言った。

車の鍵を外すと、

「後に一人で寝てらっしゃいよ」

「そんなことしなくても平気ですよ。でも貴女着物で運転出来るの」

「平気よ」

英子はさっさと彼を助手台に乗せるとギアを入れた。

大学の附属病院に向う途中、前を向きながら龍哉は吐き出すように言った。

「花をどうも。でもあんなに騒がれちゃ困るなあ。試合してててうるさくてしようがねえや」

「うるさいですって、わざわざ来たのに失礼しちゃうわ」

三人は賑かに笑った。

やがて英子が、

「津川さんて案外図太いのね。こないだはそんな風に見えなかったけど」

「厭だなあ、とてもあんな事までは図々しく出来ないよ」

五日前の土曜日、週末の慣例で、例の如く家で着替えて東京へ出直した彼のグループが持ち合わせた金を調べると案外少く、八千円そこそこでは五人でとても思い切り遊べないので、今日は一つ女給相手は止めにして、何処か素人のお嬢さんとでもと言うことになった。が今さら知り合いの娘を呼び出すのも面倒と、誰ともなく見ず知らずでも良いから、ここらをふらふらしている女の子を目にとまった順に誘って見ようと言うことに決まっ

た。がそうは言っても、いざ誰が最初に行って頼むかと言う段になると、日頃つまらぬ事には驚くほど破廉恥で、商売女を口説く時には大人以上の手管も心得たこれら紳士たちも、妙に尻込みしてやる者が無かった。そこで千円札を引いて、番号の少い者から順にその役を勤めることに決まり、そのトップを龍哉と西村が引き当てたのだ。

いざ誘いかける段となっても、あんな女はどう、こんなのはどうと、女にかけてはそれぞれ一見識ある彼等が、選り好みする間、二丁目から四丁目五丁目と来、今度は又裏通りをうろうろする裡、並木通りの角の帽子屋で三人同じ年頃の、それも揃って派手に着飾った英子達を西村が見つけた。「先ず顔を良く見て、面がハクけりゃ」と言う間に買物を済ませた彼女達が店を出て来る。三人よく似てはっきりした目鼻立ちに、英子だけが右の瞼が一重で左が二重と言う所までいち早く見て取った。

「あいつら三人とも同じような鼻してやがったな。今を流行りのプラスチックものか、ええあれは？」

と与太を飛ばしている間に三人は表通りに出て車でも拾いそうな気配で、慌てた佐原が、

「あれに決めたっ、あれを逃したらお前等今夜酒は飲まさねえから」

言われて二人は駈け出したが、側まで来ると西村の方が急にもじもじし出して、

「龍ちゃん、あんたの方が二つだけ数が少いんだから先に行ってくれ、頼む」

言われて二人同時に話す訳にも行かず龍哉は観念した。

「よし、それじゃ後にいてくれよ。そいじゃなきゃ俺だってやだよ。籤だけはついてねえんだから俺は、何時でも」

二人は又駈け出した。追い着いた時の勢は何処へやら、龍哉の掛けた声は小さかった。

「あの、もしもし、ちょっと失礼なんですが――」

怪訝そうに振り向く三人の中で、英子が荷物を持ち変えながら、ちらっと笑って、

「何でしょうかしら」

龍哉はそれだけで上っていた。

「あ、あの、ぼ、僕あ、K学園のスポーツ、いや、け、拳闘部の津川、津川龍哉と申しますが、すみません――」

と、言わずもがなの拳闘部と姓名に加えて、すみませんまで言うのに、

「まあ、拳闘」

思わずフェザー級とまで言いかけたが、旨く行くだろうかと自分に問うて、成果を一六と賭けた瞬間龍哉は落

着いていた。

〝馬鹿馬鹿しい、断られたってどうと言うこたあない。土台、始めから無理な注文をつけてるんだ。名前まで饒舌っちまったんだから、何とか手に入れてやれ〟

すると彼は軽い緊張を感じた。それは雑沓の中でふとしたことに町の与太者から因縁をつけられて立ち止まる時に感じる、嬉しくこそばゆいような緊張であった。そうした時のように、彼は薄ら笑いを浮べた。

西村が何時の間にやら後から消えているのを見ると彼は言った。

「どうも、追いつこうと駈けて来たんで息が切れちゃった——。あの僕等K学園の学生ですが、今日皆で遊ぼうとしたんですけど、誰も女の人知らないんで困ってんです。でも思い切ってどなたか頼んで見て、お暇だったらおつき合いして頂きたいと思って捜してたんですが。絶対御迷惑をお掛けするようには致しませんから、もしお暇でしたらお願い出来ませんか。仲間は五人いるんですけど。さっきからずいぶん、いろいろな人探してたんですが、どうもお話しするまでの人が無くて悲観してたんです。宜しかったら是非」

「あーら、光栄ってところね」

「でも三人じゃ」

「いえもうそれはかまいません。その方が失礼がなくてすみます」

三人は彼を外してひそひそ話し合っていたが、やがてそれがしのび笑いに変った。龍哉は角でこちらを見ている仲間に勢よく腕を振った。西村が真先に飛び上った。

「あのね、この先のM美容室に母が来てますの、今そこへ行くつもりだったんですけど。皆の買物の荷物、持って行くのが面倒ですから母に預けて来ますわ。ちょっとお待ちになって下さらない」

「え、でもお母様が大変でしょう」

「いえ、家の車で来てますから平気よ」

「でも旨くやって下さいよ。誤解されると」

「大丈夫、何なら幸子、貴女人質になっててあげなさいよ」

「いえ、そんなこと良いです。あの先にお名前をうかがえませんか」

龍哉はとって返すと、

「成功っ、良い腕だろう。西村お前だらしねえぞ、逃げちまって」

「すまねえ、生れつき俺は厚釜しくねえんだ」

「何を言ってやがる。お前は罰として今夜は皆のボーイだぞ。なあ。ええと、女の子の名は、英子に幸子に由

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo